様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１７Ｋ０４４１８

研究課題名（和文）幼児における社会情動的スキルの発達過程－個人差要因を含めた媒介・調整効果の検討－

研究課題名（英文）The developmental process of social-emotional skills in preschool children: explore mediator and moderator, including individual difference factors.

研究代表者
清水　寿代（Shimizu, Hisayo）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：９０５０８３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：他者と円滑にコミュニケーションをしたり，自己の感情と行動をコントロールしたり，物事に粘り強く取り組むために必要な能力である社会情動スキルの発達に，感情理解と抑制制御が関連するかどうかを検討した。その結果，感情理解と抑制制御は相互に関連しあいながら発達し，その後は，感情理解が抑制制御と社会情動的スキルに関連することが示された。また，個人差の視点でみると，抑制制御が低いと社会情動的スキルも低いことが示された。以上より，幼児期の感情理解と抑制制御の発達は社会情動的スキルの発達と関連し，特に，抑制制御の低い幼児への支援が必要なことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では，幼児期の社会情動的スキルの発達に，感情理解と抑制制御が関連することがわかった。学術的意義として2点があげられる。1点目は，社会情動的スキルを促進する介入変数として，感情理解と抑制制御が同定できたことである。2点目は，抑制制御の低さは，社会情動的スキルの低さと関連することが明らかにできたことである。これらの結果から，社会的意義は2点あげられる。1点目は，感情理解や抑制制御を促進する保育実践は，幼児の社会情動的スキルを促すという示唆が得られたことである。2点目は，抑制制御の低い子どもに対する個別の支援の必要性が得られたことである。

研究成果の概要（英文）：The social emotional skills enable the children for a successful social living and positive interactions with peers. Children need to be empowered to interact, to join a group of peers, to follow rules of conduct and even more to deal with disappointments and frustration. The present study examined whether emotion knowledge and inhibitory control are related to the development of social emotional skills. The results showed that emotional understanding and inhibitory control develop in interaction with each other. In the long term, emotion knowledge was found to be associated with social emotional skills. Children with lower inhibitory control were also found to have lower social emotional skills. Thus, emotion knowledge and inhibitory control in early childhood is associated with the development of social emotional skills, particularly the need to support young children with low inhibitory control.

研究分野：幼児の社会情動的スキルの発達と適応

キーワード：社会情動的スキルの発達　感情理解　抑制制御　問題行動　縦断研究　幼児　保育　個人差

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

「社会情動的スキル」とは，他者と円滑にコミュニケーションをしたり，自己の感情と行動をコントロールしたり，物事に粘り強く取り組むために必要な能力である。OECD（経済協力開発機構）は，平成 27 年度の調査報告書で，幼児期における社会情動的スキルの十分な習得は，長期的には世界経済の立て直しにまで貢献すると報告した。これを受け，平成 28 年 8 月に中央教育審議会の幼児教育部会は，社会情動的スキルの育成を教育内容の見直しにおける重要課題として位置づけている。

幼児の問題行動を抑制するための重要な要因となる「社会情動的スキル」は，“ 表情・状況から他者の喜び，怒り，悲しみ等の感情を適切に推測できる感情理解力 ”，及び “ 自己の感情や行動を状況に応じて適切にコントロールする抑制機能 ”との関連が指摘されている。しかし，社会情動的スキルの発達と感情理解力及び抑制機能との因果関係を明確にした研究や幼児期の発達の宿命である「個人差」に焦点をあてた研究は少なく，問題行動の予防策の立案に曖昧さを残している。

社会情動的スキルの育成に関するこれまでの研究では，具体的にどの要因が媒介変数，あるいは調整変数としての機能を有し，またどのような因果関係が社会情動的スキルの増減に影響を及ぼしているのかは明らかにされていない。つまり，幼児の適応を考える際，様々な介入変数間の詳細な因果関係の明確化，かつ予防的視点を含めた検討は喫緊の課題とも言える。

また近年，海外においては，社会情動的スキルの発達を「個人差」の視点で捉えた上で，その発達に影響する要因を検討する必要があると指摘されている（Santos et.al, 2014）。申請者（2016）は，探索的な研究として 4 歳，5 歳の子どもの社会情動的スキルの変化を調査した。その結果，社会情動的スキルの発達の様態として，①学年初頭は低いが，着実に伸びるタイプ，②学年初頭は低いが，途中で急激に伸びるタイプ，③変化があまり見られないタイプがいることが明らかにされた。従って，社会情動的スキルの初期値や発達増加率などの個人差を捉えた上で，感情理解力や抑制機能がどのように関連しているかを検討することによって，新たな介入プログラムの開発が期待される。

２．研究の目的

そこで本研究では，社会情動的スキルを縦断的に追跡（4～6 歳の 4 時点で測定）し，①社会情動的スキルの発達と感情理解力及び抑制機能の因果関係を明確化（交差遅れモデル）し，②発達の個人差を考慮した発達促進要因の特定（成長曲線モデル）から，有効な介入法の策定を目指す。

３．研究の方法

(1)　社会情動的スキルの発達と感情理解力及び抑制機能の因果関係の明確化

2018 年度は，社会情動的スキル尺度を作成するために，Hunter et al.(2018)が作成した尺度の項目確認及び翻訳を行い，尺度を作成した。2019 年度から 2020 年度にかけて，社会情動的スキルと感情理解力及び抑制機能の因果関係を検証するために 4 回（T1：10 月，T2:12 月，T3:3 月，T4:2020 年 3 月）の調査を実施した。

調査参加者

保育所に通う幼児 117 名（男児 49 名，女児 68 名，年少児 39 名，年中児 32 名，年長児 46 名，平均月齢 58.86 歳（*SD*=10.81））が本研究に参加した。

調査尺度

1. 社会情動的スキル尺度(Hunter et al., 2018)
2. 幼児用問題行動尺度（外在化問題行動 8 項目，内在化問題行動 5 項目，金山ら，2006）
3. 昼夜ストループ課題(Gerstadt et al.,1994)
4. ハンド模倣・ハンド抑制課題(Hughes, 1998))
5. Peg Tapping 課題(Diamond & Taylor, 1996))
6. 感情認知課題①感情のラベリング課題，②感情の表出課題，③感情の予測課題（Denham, 1986）
7. 言語発達課題：絵画語い発達検査（PVT-R，上野ら，2008）

社会情動的スキル尺度及び幼児用問題行動尺度は，担任保育士にクラスの子どもについて回答を依頼した。また，昼夜ストループ課題，ハンド模倣，ハンド抑制，Peg Tapping 課題，感情認知課題，言語発達課題は，子どもに対して個別に実施した。これらの調査は，4 回実施した。

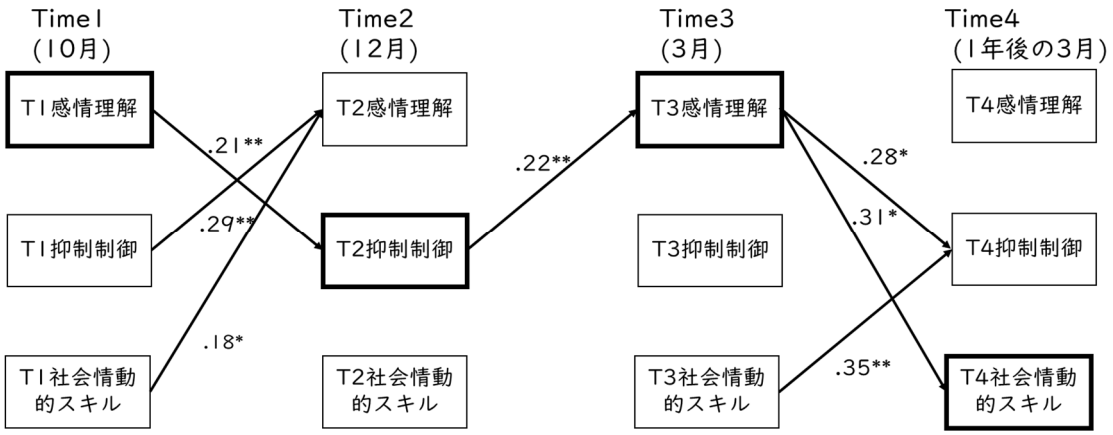
倫理的配慮
本研究を実施するにあたり，広島大学大学院人間社会科学研究科研究倫理審査委員会による承認（承認番号 2019555）を受けて実施した。

(2) 社会情動的スキルの発達の個人差に影響する要因の検討
調査の実施方法は，2019 年度から 2020 年度にかけて実施した 4 時点の調査と同様であった。これらのデータをまとめて潜在曲線分析を行った。

４．研究成果

(1) 社会情動的スキルの発達と感情理解力及び抑制機能の因果関係の明確化
4 回の調査で得られた感情理解，抑制制御，社会情動的スキルをモデルに投入し，交差遅延モデルによって因果モデルを構成した（Figure 1）。具体的には，1 回目から 2 回目への全変数間，2 回目から 3 回目への全変数間，及び 3 回目から 4 回目の全変数間にパスを引き，同一変数については，1 回目から 4 回目へのパスも引いた。その結果，T1 の感情理解から T2 の抑制制御，T1 の抑制制御から T2 の感情理解，T1 の社会情動的スキルから T2 の感情理解へのパスが確認された。また，T3 の感情理解から T4 の抑制制御，社会情動的スキルへのパスと，T3 の社会情動的スキルから T4 の抑制制御へのパスが確認された。
本研究の結果，10 月の感情理解，抑制制御，社会情動的スキルが，12 月の感情理解，抑制制御に影響することが示された。また，3 月時点の感情理解が 1 年後の抑制制御や社会情動的スキルに影響することが示された。感情理解と抑制制御は時間の経過とともに相互作用することが確認された。また，相互作用においては，初期の感情理解が抑制制御に影響する可能性が示された。このことから，他者の表情から感情を読みとり，抑制制御のスキルを備え，文脈に応じた肯定的な行動がとれることは，社会性発達や就学後の学校適応など，多くの肯定的な成果を確保するために重要であることが示唆された。しかしながら，本研究では検証されなかった交絡変数の検証（気質や社会経済的地位など）が今後の課題である。

Figure 1.
感情理解，抑制制御と社会情動的スキルの関連

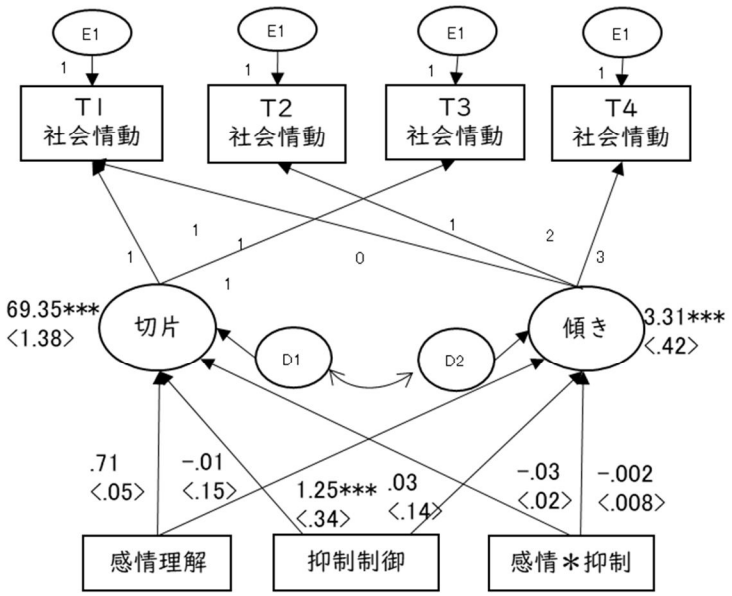


$\chi^2(27)=36.4$, *ns*, CFI=.99, RMSEA=.05,
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

(2) 社会情動的スキルの発達の個人差に影響する要因の検討
Mplus 8.10 を使用し，感情理解と抑制制御及び感情理解と抑制制御の交互作用と社会情動的スキルの発達との関連を潜在曲線モデルによって検証した。切片が Time1 時点における感情理解と抑制制御及びこれらの交互作用とどのような関連があるかを検討するために母数の推定を行った。4 時点で観測された社会情動的スキルの得点をモデルに投入したところ，満足できるモデルの適合度が得られた（χ^2=14.13，*df*=11，CFI=.984，TLI=.974，RMSEA=.053）。
分析の結果，切片の推定値は，69.35（p<.001，*SE*=1.38）であった。傾きの推定値は，3.31（p<.001，*SE*=0.42）であった。ただし，切片と傾きの共分散は有意な値がみられなかったため，社会情動的スキルの T1 における得点と，その後の T2，T3，T4 の得点の伸びとの関連は示されなかった。
次に，T1 の個人差を示す切片の分散では，抑制制御にのみ有意な値が得られた（1.25，p<.001，*SE*=0.34）。変化パターンの個人差を示す傾きの分散では，どの変数においても有意な値は得られなかった。

本研究では，社会情動的スキルの発達に，Time1 の感情理解と抑制制御及びこれらの交互作用が関連するかを検討した。その結果，T1 時点での抑制制御の低さは，T1 時点での社会情動的スキルの低さと関連していることが示唆された。一方，感情理解と交互作用については，関連が認められなかったことから，T1 時点の抑制制御の発達には特に注意を払う必要がある。本研究からは，T1 時点の感情理解及び抑制制御と社会情動的スキルの発達との関連は見出されなかった。今後は個人の発達の軌跡を詳細に検証する必要がある。

Figure 2.　社会情動的スキルの発達と感情理解及び抑制制御の関連



＜引用文献＞

上野一彦・名越斉子・小貫悟(2008). PVT-R 絵画語い発達検査　日本文化科学社

Denham, S.A.(1986). Social Cognition, Prosocial Behavior, and Emotion in Preschoolers: Contextual Validation. *Child Development*, 57, 194-201.

Diamond, A., & Taylor, C. (1996). Development of an aspect of executive control: Development of the abilities to remember what I said and to ‘‘Do as I say, not as I do.’’ *Developmental Psychobiology*, 29, 315-334.

Gerstadt, C., Hong, Y., & Diamond, A. (1994). The relationship between cognition and action: Performance of children 3-7 years old on a Stroop-like Day-Night test. *Cognition*, 53, 129-153.

Hughes, C., Dunn, J., & White, A. (1998). Trick or treat? Uneven understanding of mind and emotion and executive function among ‘‘hard to manage” preschoolers. *Journal of Child Psychology and Psychiatry & Allied Disciplines*, 39, 981-994.

金山元春・金山佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子(2006).　幼児用問題行動尺度(保育者評定版)の改訂，学校カウンセリング研究，12，25-3.

Santos, A. J., Vaughn,B. E., Peceguina, I.Daniel, J. R., & Shin, N. (2014). Growth of Social Competence During the Preschool Years: A 3-Year Longitudinal Study. Child Development, 85, 2062-2073.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 森田晃成・清水寿代	４．巻 45
２．論文標題 幼児期における身体的・言語的関わりと子どもの社会的行動の関連	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/54604	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 本勝 仁士・清水寿代	４．巻 45
２．論文標題 親の共感性及び寛容性と不適切な養育の関連 ： 不適切な養育低群と高群の比較検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/54605	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 楊依梵・清水寿代	４．巻 45
２．論文標題 中国における夫婦関係が子どもの問題行動に与える影響 ： 養育態度を媒介したモデルの検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/54603	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 楊　依梵・清水寿代	４．巻 44
２．論文標題 夫婦関係と養育態度が子どもの問題行動に及ぼす影響	５．発行年 2022年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/53087	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 七木田敦・杉村伸一郎・中坪史典・清水寿代・井辺和杜・表夏子	４．巻 44
２．論文標題 東広島市の就学前保育施設の保育の質と乳幼児の育ちに関する評価研究: 令和3年度報告から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/53082	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清水寿代・濱田祥子・上山瑠津子・杉村伸一郎	４．巻 43
２．論文標題 広島県における幼児教育アドバイザー訪問事業の効果検証：3年間の縦断的検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51493	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杉村伸一郎・上山瑠津子・濱田祥子・清水寿代	４．巻 43
２．論文標題 幼児教育アドバイザー所感における助言の内容とタイプ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51494	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上山瑠津子・杉村伸一郎・清水寿代・濱田祥子	４．巻 43
２．論文標題 幼児教育アドバイザーによる継続訪問の効果 ： 所感の変容の分析から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 幼年教育研究年報	６．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51498	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上原舞子・清水寿代	4．巻 43
2．論文標題 乳幼児をもつ母親の育児自動思考が養育行動に及ぼす影響：マインドフルネスの媒介効果	5．発行年 2021年
3．雑誌名 幼年教育研究年報	6．最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51498	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森岡まどか・清水寿代	4．巻 43
2．論文標題 養育態度とソーシャルサポート及び育児感情の関連：養育態度の種類に着目して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 幼年教育研究年報	6．最初と最後の頁 91-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51502	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小田穂香・清水寿代	4．巻 42
2．論文標題 愛着スタイルと乳幼児との接触時感情が養護性に与える影響 ： 情緒応答性の関連の検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 幼年教育研究年報	6．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50044	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上原舞子・清水寿代	4．巻 42
2．論文標題 マインドフルネスが育児不安に及ぼす影響 ： 母親と末子の年齢を調整変数として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 幼年教育研究年報	6．最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50045	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 清水 健司 ，清水 寿代	4．巻 6
2．論文標題 自己愛傾向と安心さがしが友人関係における適応的側面に与える影響	5．発行年 2018年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 七木田 敦 ，清水 寿代 ，杉村 伸一郎 ，中坪 史典 ，津川 典子 ，富田 雅子 ，森 依子 ，周 心慧 ，本岡 美保子	4．巻 40
2．論文標題 第2子を持つ親子のための子育て支援プログラムの構築 ： 東広島市子育て支援センターとの協同から	5．発行年 2018年
3．雑誌名 幼年教育研究年報	6．最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/46527	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計33件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 楊依梵・清水寿代
2．発表標題 母親の養育態度と子どもの問題行動の関連についての検討
3．学会等名 日本教育心理学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 清水寿代・楊依梵
2．発表標題 養育態度及び育児におけるコミュニケーションの質と子どもの社会的コンピテンスの関連
3．学会等名 日本教育心理学会
4．発表年 2023年

１．発表者名 近信優衣・五十嵐亮・楊依梵・清水寿代
２．発表標題 大学生が認知している両親の養育態度と児童期の社会情動的スキルの関連
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水健司・清水寿代
２．発表標題 指導者との信頼感と言葉かけが大学柔道選手の動機づけに及ぼす影響
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水健司・清水寿代
２．発表標題 森田神経質が強迫観念傾向に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 楊依梵・清水寿代
２．発表標題 中国における夫婦関係が子どもの社会的コンピテンスに与える影響
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 幼児の感情理解，抑制制御及び言語能力の関連
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水寿代・本勝仁士・松井杏樹・森田晃成
２．発表標題 ペアレントプログラムの視点を取り入れた保育士研修会の効果 保育士ストレス及び保育者効力感に着目して
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 楊依梵・清水寿代・近信優衣
２．発表標題 夫婦関係，養育態度と子どもの問題行動との関連 日本と中国の比較
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 幼児の感情理解が社会情動的スキルの発達に及ぼす影響
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 森田晃成・清水寿代
２．発表標題 幼児期における母親の身体的・言語的関わりと子どもの社会的行動の関連
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水健司・清水寿代
２．発表標題 認知的統制と対人ストレッサーが強迫傾向に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理臨床学会第41回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 楊依梵・清水寿代
２．発表標題 夫婦関係と子どもの内在化問題行動の関連 ―養育態度の媒介効果に着目して―
３．学会等名 日本教育心理学会第64回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 幼児の問題行動に及ぼす要因の検討:感情理解，抑制機能，保育者と子どもの関係性に着目して
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 清水健司・清水寿代
２．発表標題 価値づけされた行動を継続することによる精神的健康の維持効果
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 非認知的能力に影響する要因の検討―感情理解及び抑制機能に着目して―
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 幼児の感情理解が社会情動コンピテンスに及ぼす影響―抑制制御を媒介として―
３．学会等名 日本発達心理学
４．発表年 2022年

１．発表者名 森岡まどか・清水寿代
２．発表標題 子どもの行動に対する親の認知および感情が養育態度に及ぼす影響―親の感情状態を媒介要因として―
３．学会等名 日本発達心理学
４．発表年 2022年

１．発表者名 楊　依梵・清水寿代
２．発表標題 夫婦関係が子どもの問題行動に及ぼす影響―養育態度を媒介要因として―
３．学会等名 日本発達心理学
４．発表年 2022年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 幼児の感情理解が社会情動コンピテンスに及ぼす影響ー抑制制御を媒介としてー
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 森岡まどか・清水寿代
２．発表標題 ソーシャルサポートが養育態度に及ぼす影響ー育児感情を媒介要因としてー
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 清水寿代
２．発表標題 幼児の非認知的能力に影響を及ぼす要因の検討
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 幼児の感情理解と抑制制御の関連
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水健司・清水寿代
２．発表標題 認知的フュージョンと価値の明確化が精神的健康に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水寿代・清水健司
２．発表標題 保育士と幼児の関係性が社会性の発達に及ぼす影響　―縦断的検討―
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水健司・清水寿代
２．発表標題 マインドフルネス瞑想が社交不安に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上原舞子・清水寿代
２．発表標題 乳幼児をもつ母親のマインドフルネスと育児感情の関連―注意の制御の調整効果―
３．学会等名 日本認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shimizu, H. & Shimizu, K.
２．発表標題 The relations of children’s emotion knowledge and executive function to their observed cooperative play and isolative behavior in preschool.
３．学会等名 THE 20TH PECERA international CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shimizu, H. & Shimizu, K.
２．発表標題 Social emotional competence in Japanese preschool children: Associations with emotional knowledge and inhibitory control.
３．学会等名 The 19th Annual Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shimizu, K. & Shimizu, H.
２．発表標題 Effect of brief mindfulness meditation on mental health of undergraduate students
３．学会等名 The 19th Annual Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水寿代，浦上 萌，上山瑠津子，鄭 暁琳，三宅英典，清水 健司
２．発表標題 抑制機能と感情理解が幼児の社会性に及ぼす影響
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 清水健司，清水寿代
２．発表標題 森田神経質と安心さがしが恋愛関係に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 清水健司，清水寿代
２．発表標題 失敗経験後の森田神経質者における有効な自己教示的対処
３．学会等名 日本教育心理学会第60回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 清水寿代	４．発行年 2019年
２．出版社 中央法規	５．総ページ数 183
３．書名 新基本保育シリーズ8保育の心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関